

鐘鼓云々一變通
 帝の仁政を述ぶ
 即ち誅の鼓を樹
 けても斯ふるも
 のなれば鼓に
 首を生じ罪人を
 打つ答を罪人の
 に換ふれば皆徳
 に感じて犯さぬ
 故蒲朽ちて養生
 ガとなり一和漢
 朗詠集一偏へ
 ろりは一引續
 いて
 警蹕天子出御
 の時先拂の聲の
 五ツ緒一桐車の
 麗にかゝれる緒
 蔡野一河内の交
 野東穂一稻穂の
 房々と長きもの
 管籥云々一民が
 王の樂を聞き王
 の羽毛の旗を見
 て喜び迎ふる體
 なり(蓋子)

蟬丸

第一

諫鼓苦深ふして鳥驚かず、刑鞭蒲朽て螢空しく去るとは、今此時よ秋津君、延喜の帝の
 御盛徳、申すもおさく有がたし。治まる國や民草の、猶其榮へ衰へを、直に觀覽有る
 べしとて、唐土の聖代の巡狩になぞらへ、交野のみ野の櫻狩、今日の紅葉とをりはへ
 て、月卿雲客供奉せしめ、はや警蹕とよばふなる、御狩車の五つ緒も、五ツの常の道芝
 や、惠の露に濡きて、御幸有こそ目出度けれ。禁野を過ぎて波激院、賤が門田の八束穂
 に、竈の煙りほのくと、戸ざさぬ御代の民百姓、管籥の聲羽施の美、欣々然と
 悦びて、君が御狩を待顔に、空飛ぶ鳥も御車に、群り慕ひ囀りしは、實に賢王の慈愛、
 鳥獸にも通じけん、民安全のしるしなり。時に行く手の松が根に、幼なき者の泣く聲す。
 藏人を以て召るれば、まだ乳ばなれぬ捨子なり。主上御涙ぐませ給ひ、「我國民を憐み育

乳房を云々乳
にて湯を養ふ例
二十四章にあり

目元云々顔や
素振

初霜に云々凡
河内躬恒の歌を
とる

むといへ共、子を捨る邪見の者、我國に有る事、朕が不徳の誤り」と、忝けなくも龍顔に、御涙をぞかけ給ふ。然る所へ十八九なる女房、あはたどしく駈來り、「なふ其子返させ給へ。返し給へ」と泣き叫び、「まつたく捨子に候はず。妾老母を持候ふが、今は老きのはも落て、物參らせん様もなく、乳房をふくめ養ひ候。此子が争ひむつがる故、暫時外方にすかし置いて候。聊捨は致さぬなり。返してたべ」とぞ泣き居たる。主上御手をはたと打ち、「扱は捨子にてはなかりしな。子にかへて母をいたはる孝行、賢女とも云ひつべし。して汝は夫は無か」女さん候夫は去年の秋霧と、消へても残る佛の、形見は此子」と計りの、涙もいづれ由あつて、目元のくらる袂はづれ、育床敷女なり。主上感じ思召し、中納言希世を召れ、鬻窮民を養ふは昔の道。彼が老母諸共、汝に預け與ふる條、大内に誘引し、よくよく養ひいたはるべし。ついで斯る豊年の悦び、天に訴ふる兆ぞや。初菊の宴を催し、紫宸殿にて音楽を奏し、五穀豊饒を祝ふべし」と、世に畏る御勅宣、仰ぐもおろか三重なりけらし。初霜よ初霜に、おらばやをらん花の宴。菊見の御遊糸竹の、其役々を別たれし、中にも當今第四の御子、蟬丸の宮と申せしは、天性美男の御器量、天皇御寵愛淺からず、琵琶に妙を得たまへり。扱又琴は蟬丸の、北の御方と定めらる。そ

二つ違ひ一蟬丸
は廿歳なれば云

渡殿一廊下

若しや逢瀬一夫
に逢はれぬを歎
くさま

釋迦一女色を還
ざぐる釋迦
成敗一も仕置

も此姫君は右大辨早廣が妹にて、はや十八の秋風も、ふさがで通す振袖や。二ツちがいの爪琴は、似合比とのしらべかや。月出なば、管絃を始むべしとの御沙汰にて、衛士は烏帽子を傾けて、月待つ程の篝火も、ゆうに目出度き景色なり。蟬丸は唯一人、月や出しと欄干の、奥の渡殿見たまへば、琴を枕に女の寢聲、斯くこそ謠ひ出しけれ。「ゆふべく」のわが涙川、もしや逢瀬の波枕、それを頼みにうき身をおぐるゑ。此年月をるる宮驚き御覽あれば、北の方にておはします。お傍によりて「是々、今宵の管絃はれがまし。琴を枕の假寢は、調子もや狂ひなん。誰か有るそれく」との給へば、「はつ」とこたへて女房達、御枕參らす。北の御方つと寄り、宮の御太刀ずばと抜き、御長枕引きよせ、二ツに丁ど切り給へば、宮は驚き繩り付、「こはそもいかに狂氣か」と、呆れ果てぞおはしける。北の方聞き給ひ、「全く狂氣に候はず。お主様と自は、夫婦と成て二年の、幾夜を重ね候へ共、あはぬ縁かや但はお氣にいらざるか。ついに一夜も肌ふれて、枕かはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬ物。男持つたも名計りぞ。益もなき長枕、科はなけれど成敗」と、恨み詫つと泣き給ふ。宮うなづかせ給ひ、「チ、恨み左もあらん。云出すべき折もなく、今までは打過し。親の命をむかれず、夫婦とは成りつれど、我幼少よ

一生不犯—一生
女色を斷つ

も氣の云々—氣
を利かして下さ
る

よどみ—櫻粧、
經水の帯る戲な
ちん

にほひ—櫻—葉の
跡—誓紙をいふ
清淨—三誓淨行
をさす

り出家を望み、一生不犯の願を立て、佛に誓言たてしゆへ、是非なき事と斷念たまへ」と、共に涙をながさるよ。北の御方涙を止め、「ム、扱は左様に候か。然らば妾も出家をとけ、此世はわづか永き世の、心が誠の夫婦ぞや。今より自も誓文立て、互に心を恥ぢしめて、身を汚さず清淨に、目出度く發心とけ申さん。しかし今宵は誓文がため、一世一度の色床は、佛もお氣の通らめ」と、膝にもたれての給へば、さすが亂るよ花すよき、詞に露を慕はせて、簾中三重ふかく入り給ふ。月かあらぬか茜さす、衛士は篝を焚きさして、さめぐとぞ泣き居たる。蟬丸御覽じ、「目出度き御遊の折から希有の落涙、心得がたし」との給へば、烏帽子かなぐり、「是御覽ぜ。なふ御見忘れ候か。我は一年春日の里にて、假寢のお情候ひし直姫にて御座候。有しあふ瀬の川水の、よどみぐて月かさなり、君の御子を生み參らせ、不思議の事にて御父皇様に、老母諸共拾はれ候へ共、君の浮名を憚り、夫は死せしと偽はり、希世の卿に侍かれ候が、せめてお姿見まほしく、衛士の男に出立し、迎もいやしき此身にて、添ひ奉るは叶はぬこと、血判を染て給はりし、誓紙も今はよしなし事。只今やきすて奥様とは、おなかよし野の初櫻、火花も薫れ」とにほひ墨、くべんと爲しを引留め、蝶「明暮忘るよ隙もなく、乳人の清貫を尋ねに出し、出家の望

つくば川一著く
にかく陽成院
の歌をとれり
せうと一兒

眞紅云々一赤筋
の縦横にある

みと偽り、妻の傍にもぬる夜なき、我をばむけに此誓紙、灰になせとは曲もなや」と、嘆ち給へば直姫も、袂に抱きつくば川、積る戀しさ逢ふ時は、心おくれに胸さはぐ、そごろぶるひの姿なり。爰に北の方の御せうと、右大辨早廣此體をきつと見て、早今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ」官人舍人我もくと駈出る。聲に恐れて人々は、築地が隈に逃給ふ。早廣誓紙を拾ひ取り、「さあ證據は握つた。奏聞せん」とひしめけば、人目も恥ず北の方、「なふはしたなし宮の御名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ兄上様」と、涙にくれての給へば、早廣眼に角を立、「エ、言甲斐なし。結構だても事による。宮を聲に持てこそ、一門親類榮花もあれ。兄が鼻迄ひしぐるか。夫を寝とられ口惜ふは思はぬか。これ證據を見よ」と誓紙を出せば、北の方披見あり。宮の御手跡紛れなし。くわつとせき立顔面に、血筋は眞紅の網を張り、髪さかしまに立のほり、嗔恚の身ぶるい齒をならし、北エ、たらされし口惜や。恨めしや妬まじや。思ひ知らずや此恨み、思ひしらせん思ひしれ」と、天地を睨む兩眼に、血の涙をはらくく、「はら立や」と、ずんくりに喰ひ裂きすて、衛士の焼く火はものはのはの、胸の煙りはくるくく、狂ひわなよき出給ふは、恐ろしくも又三重憐なり。いでや其頃蟬丸の御乳人左衛門督濟貫は、直姫を尋ねんため、

山。くらくくくく湧き返り、玉ちる川瀬浪の音、梢を渡る小夜嵐、どうくさらさ
 らくどうくくく。とんどろとどろと踏鳴し、世を宇治橋の橋姫の、宮居を拍き祈り
 しは、身の毛彌立計りなり。清貫今が見始め、何とやら氣味悪く、枝に取付き見る所
 に、又向ふ、り同じ姿の人影見ゆる。眞ヤア是も丑の時。さて澤山や天狗の所爲か。但狐
 や魅しぬ」と、睫毛を濡して居たりけり。二人の女も見交して、互にぞつと仕たりしが、初
 の女小聲になり、「なふ和上臈は何人ぞ」とあれば、「左言ふ御身は何者ぞ」「ヲ、御身にか
 はらぬ姿なれば、祈りも同じ嫉妬よの」「されば我も悋氣ごと。扱も世の中に性のよき男
 はなし」「扱々合たり叶ふたり。いざ立ながら悋氣講をはじめ、語りてうさを晴さん」と、
 先、傍に立寄れば、清貫恐さも打忘れ、「急な所の悋氣講」と、可笑どうも耐られず、ふつ
 と吹出す計りなり。「扱も妾は女院の上童、芭蕉と申す者なるが、及ばぬ戀とは申しなが
 ら、幼き時より蟬丸様に思ひをかけ、斯くと口説申せしかば、一夜は思しを晴させんと、
 堅き約束候へ共、奥様せいたうつよきにや、お約束も夢となる。一人焦れ死なんより、
 斯く祈り申す」と、云ひもあへぬに初の女、「我こそ宮の北の方。妾を恨むは僻事ぞ。直姫
 と云ふいたづら女郎ゆるゑ、自も捨られし。憎い奴は直姫」と、牙を鳴して語らるれば、清貫

聞けば餘所ならず、肝を潰して居たりしが、ばせを手を打、「扱奥様か。知らでお恨み申したり。戀の敵は直姫一人。いざ打殺し、共に本意を遂げ申さん」北「ヲ、尤」と神木に立並び、「鬼とも蛇ともなし給へ」と、肝膽くだき釘取出し、「これは直姫が兩眼にうつ釘、早つぶれよ」と丁と打、「これ首の骨胸板五體腐れ」と礮と打、四十四本の釘の數、「筋骨節々つがひつがひ、打て思ひを晴せよ」と、踊り上り飛あがり、てうくはたく丁とてば、釘目より血ながれて、左しもの大木動くにぞ、清貫もゆらくと、漂ふ舟のごとくなり。餘りゆられて目眩き、枝踏外しどうと落る。二人は驚き飛で遁るを、北の方の小腕とつて立歸れば、その隙にばせをの前、行衛も知らず逃け失せけり。清貫今は堪られず、「これ御臺様、人にこそよれ、はしたなき御振舞。明ぬ先にさあお歸り」と申せ共、聞き入ず、北人に知られて此大願、空しかるとも一念は、死して報ひを知らせん」と、戀の浮名やたちばなの、小島がさきは大紅蓮、逆捲水に飛入て、哀果敢なくなり給ふ。清貫のはて「松明々々」と、云ふ聲に里人ども、松明灯燈星のごとく、爰かしことぞどよめきける。時に小波岸をたき、あら恐ろしや北の方の遺骸むつくと起上り、角は忽蛇身と成り、鱗を振ひ炎を降らし、浪を蹴たてて三重捲上り、鳥居の笠木をくるくく、くるりくと引纏ひ、

笠木鳥居の上
にわたす木

たちばなの小島
岸、立ちにかく

そこはかとなく
いづこともなく

由々敷一莠まし
尾花鞆一絳形の
羽の所

げしうはあらぬ
一賤しからぬ

虚空に向つてつく息は、只火の雨の如くなり。人々これに恐怖れ、「わつ」と云ふて逃け散れば、大蛇は川瀬に飛入て、生かはり死かはり、「生々世々に恨みを爲さん。あら恨めしや口惜」と云ふ聲計り水底の、そこはかとなく流れゆく、宇治の川霧たへぐに、明け行く空と消へてんけり。おそろしし凄じし。尤も果敢なし哀なり。さて戀路は切なるおもひぞや。

第二

爰も戀路に名を立し、情の峠程近き、木幡の里の片傍に、千手太郎忠光と云ふ者あり。元來由々敷弓取成が、今浪人の身乍らも、飢ず凍ぬ芝の庵、明暮殺生を樂み、尾花鞆に弓取添へ、今日も狩場に出にける。深草山のすど原より、兎一疋追出し、弓矢取て打番ひ、弓手もぢりに放つ矢を、手先さがりに射損じて、誰が刈積し稻村に、はぶくら込てずばと立、兎は逃れ失にけり。「弓矢八幡射損ぜし、いで矢を取らん」と、稻引退ればこは如何に、廿計の殿上人、二八餘の上藤の、左の袂に矢を受て、涙に萎御在ます。忠光はつと驚き、「知ぬ事は是非もなし、見奉ればけしうは有ぬ御有様、怪しや語おはしませ」

若草に云々一武
藏野は今日はな
橋きも云々の歌
による

賭鞍一競馬

妹一芭蕉の事

左もさうザ一左
もありなん

「チ、我は當今第四の宮蟬丸と云ふ者よ。是成女は直姫とて踏も慣はぬ若草に、妻もこも
れり追風の、追手も急に來るべし。萬事は頼む」と宣て、又御涙にむせ給ふ。思ハア扱は
蟬丸の宮にてましますか。某は千手太郎忠光とて、古は賭鞍にも乘し者。殊に某が妹
は女院様のお末の奉公仕る。然れば大内縁と申し、數ならぬ某を、斯る高位の御頼
一命も惜からず。父は千手入道とて、年罷寄たれ共、甲斐々々しき覺の者。一先私宅へ
御供申、仔細は靜に承はらん。去來させ給へ」と云ふ所へ、右大辨早廣、兵仗二三十爰
彼處と搜索し來り、早「彼れこそ蟬丸直姫よ。搦捕れ」と喚て懸る。忠光面に立塞り、「是々
これく扱方々は追手よな。宮の御誤は卒知らず。某は千手太郎と云ふ者よ。苟くも
頼れ參らせし。疾々歸れ」と呼びける。早廣大きに怒り、「宮は不義の誤り故、召捕との
勅誑成が、綸言に立つくは、扱は己めは朝敵か」と云へば、思「いやさ朝敵にもせよ。とん
敵にもせよ。武士の一言綸言より重し。頼ると云ふからは、命は君に奉る。悪く寄
らば蹴殺さん」と、力足をどうと踏む。早廣怒て「何の二歳奴、討取れ」と、群り掛を、飛退り
矢束くつろけ矢續早、差取り引詰め空矢もなく、雨の如くに射懸れば、早廣も叶はじと、
皆散々に落失けり。思「チ、左もさうず是迄」と、直姫を肩に掛け、宮の御手を引參せ、己が

宿所に 三重歸りける。既に其日も暮過て、左衛門の督清貫は、蟬丸落失給ふと聞き、京
 近邊を尋廻り、木幡の里に着けるが、草鞋切れて行暮し、村雨しきる今宵しも、宮坐ま
 す共知ばこそ、千手が門の茅葺に、晴間を凌ぎ立れけり。雨にこもれる夜半の鐘、霧の
 絶間を透し見れば、女の姿振袖も、最忍びたる氣色なり。木影に立退見給へば、彼女門の
 扉を忙しげに、「物申さん」とぞ叩きける。千手親子は「すは追手よ」と走出、「夜中の案内何
 者」と云ふ。女「なふ然の給ふは兄上か父上か。ばせをの前にて候が、傍輩の讒に合、御所を
 紛れ出候。爰開給へ」と云ふ聲に母は驚き、「扱は我子か懐しや」と、閉んとすれば父の入道
 「ア、暫く、大事は油断より起るぞかし。宮を隠匿奉り、夜中に門を開ん事不覺の至り。
 是々ばせを、仔細有て夜中に門を開く事は叶はず。今宵は夫にて明せ。明なば内へ入れ
 ん」とあれば、女「こは心得ぬ仰かな。如何成憎み候ぞ。是非開て給べ開給へ」と、掻口説てぞ
 歎きける。父「いやく憎しみはなけれ共、今宵門を開きては親兄が侍立ず。仔細は明朝
 語るべし。はや夜明迄程もなし。是を片敷明せ」とて、内より小袖を投出せば、ばせをは
 力なくくも、衣引被き臥居たり。清貫ばせをと聞くからに、彼奴こそ彼丑の時参りご
 さんなれ。大内の有様尋んと、徐りくと傍に寄、作聲して「申」と云ば、「ア、恐」と云逃

一樹の宿云々
一河の流を放り
も皆是他生の縁
引手あきたる
古今集の大半の
引手數多の歌に
よる
念力岩を云々
詔、彼の熊渠子
石を虎と見て射
込みし話（韓詩
外傳）
面伏—面目なし

んとす。遇ア、く、是々苦からず。我は田舎の旅人成が、雨を凌て罷有。承れば大内方の人様とや。拙者共は田夫野人の遠國者、殿上の交際夢に見た事も候はず。國元の土産に語り聞させ給へ」と有。ばせを打笑ひ、「田舎のお衆は何も左様にの給へ共、さして變りし事もなし。糸竹詩文和歌の道、取分流行は濡事」と、莞爾と會釋し申しける。清貫伴爲た顔付にて、「エ、野でも山でも廢らぬは戀の道。定めし上臈様もさう仕た色候はん。さあさあ聞たしく」と云へば、女「一樹の宿も他生の縁」と、包ます語る無心さよ。「恥し乍ら自らは、禁中一の美男蟬丸様に思ひを懸け、様々心つくし舟、引手數多の殿なれど、酒の一夜の玉霰、轉び寢んと約束を、山なき女に支へられ、遂に思ひの晴間なき、涙の雨に身は朽る。念力岩を通すとの、譬に偽りなきならば、死る共生る共、此無念は晴すべし。エ、面伏口惜や。や、よしなの問はず語り、穴賢こ。人にな洩し給ひそ」と、又むせ返りせき上て、袖は時雨に争そへり。清貫篤くと聞からに、「なふ恐ろしの一念、終に蟬丸直姫の仇とならんは必定。如何成事をか仕出し、御命に障碍あらば、後悔に甲斐あらじ」と、近頃不使千萬乍ら、太刀拔潛めて取て引寄せ、心元を刺通す。女なふ悲し人殺し」と、呼はる聲に親子の者、門を開き飛出る。悪かりなんと清貫は、篠の小藪に走入り、暫ら

く潛みおはしける。母は縋りて悲しめば、入道親子も敗亡し、盗人の所爲なんめり、追
 駈んとは仕たりしが、宮の御事氣遣しく、立もやらす居もやらす。蟬丸も直姫も、周章
 狼狽給ひける。今を限りのばせをの前、宮を倩々見參らせ、苦しげ成息を次ぎ、玄ム、夫
 成蟬丸様、直姫御前とは御身の事か。怨めしや恥かしや。僞り多き御一言、誠と思ひ身
 を焦し、戀に心を悩まして、有れぬおもひに狂ひしも、只一筋におもふゆる。君が戀路
 の障碍ならば、をもひ切れとはの給はで、誑かり殺さん御計策か。餘まりに酷き御心。
 情の道は左はなきもの。なふ憎ふて人には惚れぬぞや。果敢なの戀に朽果ん名こそ惜し
 けれ。去乍ら我里に、お宿を召すも他生の縁。草の蔭にて君が爲、悪かれとは祈まし。
 詞の由縁と思しなば、餘の人千度百度より、君が一度の手向草、露の命は惜からず。な
 ふ父上様兄上様、宮の御事偏に頼み奉る。名残惜の母上様、南無阿彌陀佛」と、云ふ聲も、
 眠れる花の夕べの秋、十七歳を一期として、終に果敢なく成にける。親子は夢とも辨ま
 へず、縋り付いて泣ければ、蟬丸直姫聲を上げ、「去り逆は覺なし。恨を晴よ免して呉よ。
 不便の者の心や」と、抱き付縋り伏、泣ど叫べど甲斐ぞなき。物の哀の限りなり。清貴案
 に相違して、今は堪兼案内し、「斯様々々」と云ひければ、思聞及びし清貴殿か。先此方へ」と

歌者一喜び思ふ

さもしく一早劣

青侍一若侍

請じける。清貫人々に對面し、「甲斐々々敷も御隱匿、我身にとつて祝着」と、禮義細に相述べ、「先以て御息女不慮の最期、御愁傷察したり。去年ら此敵は知れ申す。本望遂させ申さん」と有ば、忠光悦び、「夫は何國如何なる者にて候ぞ」遣テ、此清貫こそ敵なれ入道親子仰天し、「一圓に心得ず。何様仔細候はん、承らん」と眉を擧て申ける。清貫涙を潸然とこほし、有し段々心底を精しく語り、「宮此所に坐すとは存ぜず、御行末の仇と思ひ、不便乍らも討たりし、忠は返つて不忠と成、仇は情と成たりし。短慮と云ひ粗忽と云ひ、面目も候はず。今は恨みを晴給へ」と、太刀を逆手にすばと抜き、既に自害と見えける時、親子左右に取付き、「なふ清貫殿我々も侍なり。一家命を抛つ上は、さもしく悔残るべきか。大事を抱へて是式に、死んとは狼狽しか。但しは狂氣か。さあ死なれふば死で見よ」と、様々宥め止むれば、思ひ切たる清貫も、理に詰られて死れもせず、生ても居られず殺しもならず。三人目と目を見合せて、涙を流ぞ道理成。早東雲に及びし時、右大辨早廣、青侍ばらに物の具させ、直姫の老母同じく若君奪取り、陣頭に引立、千手が屋敷を取圍み、早御勘當の蟬丸を隠匿し段、逆鱗斜ならず。太平の君が世に事を好むは痴人なり。疾々蟬丸直姫を渡せ。異議に及ば先づ一番に彼奴らを殺すと、刃を胸に

軍神云々―出陣
の時黙を磨り血
を手向くる例

とめ―突留め

拜打―眞向に擬
駁して打つ

御手―縦横に

差當て、「さあ返事は如何に」と、聲々に喚き叫んで呼はりける。忠光親子清貫も、人質に
 倦み果て、左右なく切ても出難く、如何はせんと特きて、兎角時刻延行ば、早エ、緩慢し
 軍神の手向草。夫突殺して切入れ」と、痛はしや御老母二歳の若君諸共に、只一太刀に害
 せしは、目も當られぬ次第なり。「エ、天道知ずの人畜奴。一人も脱さじ」と、枕長刀追取
 伸べ、四十餘人を左手に請、右手に支へて 三重戦ひける。千手太郎が手に懸て、十六人
 とめければ、入道が長刀に、八人懸てぞ捨てける。残る者も深手を負ひ、颯と引ては又
 駈入り、二三度四五度揉立しに、千手親子聲を掛け、「清貫は在ぬか。宮を御供申されよ。
 跡を構なく」と呼はれば、尤と清貫宮を負參らせ、己が館に落ちるよ。其隙に早廣後の
 垣を押破り、直姫を引立大地に踏付拜打に振上る。「南無三寶」と、入道横間に丁ど受け、
 火を散らして切結ぶ。太郎は父を討せじと、討て懸れば入道隔て、「父が命を庇ふな。姫
 君を討せなば、七生迄の勘當」と、云ふ聲に力なく、母と姫とを兩脇に、搔込で上の山へ
 と落行きける。入道は面も振らず、追行く敵を防しが、早廣奇て打太刀に、左手の肩先
 打込れ、七十一歳春の夜の、敢なき夢とぞ消にける。忠光「父は如何ぞ」と取て返して、「ハ
 ア、口惜や討せつる。目前親の敵ぞ」と、退く敵を蓋に乗、蜘蛛手に追立追返し、半時計駈

父父たり云々
父が父なれば子
も子なり(論語)

十善一前世にて
十惡を犯さぬも
の今世に王と生
る

たりしが、早廣は行方なし。忠エ、無念口惜し。己れ天地を出ずんば、討て父に手向ん」と、僅に残る雜人共、木の葉の嵐磯打波、むらくくばつと追散し、父が死骸の薄煙、霞の谷へと分入し。父父たれば子も子たり、天晴由々し頼母しし、前代未聞の勇士やと、扱は文にも殘し留めつる。

第三

早廣が惡逆故、宮は虎口の御命脱がれ、清貫が計ひにて、中納言希世の館にお坐せしが、或時清貫希世參内あり。「扱も蟬丸の宮、往時臯月の頃より御眼病例ならず。唐の大和の藥を以て、醫療手を盡し候へ共、元來宮の御事は、美男目出度まします故、數々の女の思ひ、嫉妬の恨み御一身に逼り、醫術の及ぶ所ならず。終に御兩眼盲させ給ひ、蒼天に月日の光りなく、闇夜に灯火影暗き、盲目の御容體力及ず候」と、詞を揃へ奏せらる。天皇はつと御氣色換り、御落涙坐ませしが、「誠に朕が第四の宮と生れ、十善の位をも知るべき身が、生れもつかぬ盲目と成し事、能く前世の惡業深きゆゑ。五體不具にして佛には成難し。況んや此世さへ暗きに迷ふ盲目の、未來の闇も痛はしや」と、良御涙にくれ給

隠幕の闇云々
 八百屋の娘お七
 とて屋路の闇の
 暗がりに云々と
 歌の落葉にある
 歌をとる
 暗がりに牛一あ
 やめもわかぬ謎
 玄上村上帝此
 琵琶を弾じて仙
 人に逢ひ玉ひし
 事盛衰記に見え
 たり

ふ。「よし／＼此世にて、諸人に恥を懺悔して、業障を果たし後世を助くるいとなみ、逢坂山に捨置べし」と、綸言有こそ哀なれ。兩卿詞を揃へ、「宣旨にては候へ共、しづ樵夫さへ不具なる子は愛憐し。況んや一天の若君を、山野に捨てさせ給はん事、且は仁心薄き似たり」と、恐れ入て申さるれば、帝「いやとよ、生とし生る物子を憐れまぬはなきものを、況てや我が親心、身にも換まく思へ共、過去遠々の悪業は、十善王位も脱れずと萬民に知らしめて、天下の民を悉く、佛の道にいれん事、廣大の慈悲ならずや。子の愛憐きは盡せねど、國を育む我なれば、國民には換難し。構て汝ら露程もいたはらば、返つて仇と成べきぞ。疾々山に捨置べし。果敢な浮世や淺ましの人界や」と、御冠の巾子を傾ぶけて、御涙せきあへさせ給はねば、八省百官諸共に、各々袖をぞ絞らるよ。清貫希世兩卿も、力なく／＼退出ある、世のならわしぞ三重定めなき。

蟬丸あふさか山入道行

結ぶの神も偽りや。何時の月日に結び初め、寢初し夜半の夢消て、縁さへ薄き唐衣。御帷はしや蟬丸は、何の報か浮世の闇、戀慕の闇の暗がりに、引出す牛は昨日かも、御幸

水鳥一見ずにか
栗田口一泡にか

歌の中山一歌の
中の句は五字な
る故云ふ此山
は清閑寺の上
あり
天の帝一天智天
皇にて御廟野は
其陵
民を遺みの一秋
の田の蒔穂の庵
の歌

ないそ云マ一舞
と泣とかく一な
泣きそ音便一
松の葉にある唄

東風菜一虎杖

の車引かへて、野飼に扮す綱手繩。御身に添ふる物とは、立上の琵琶一面。清貫希世
 御供にて、三重萎れ出させ給ひける、御有様こそ哀なれ。秋さればく、月の障碍と泣
 き歎きつる、東の山を超へ行ど、今盲目の御身には、何の光りも水鳥の、加茂の河岸波
 越へて、契りも末の松坂と、消ばや爰に粟田口。秋未若き山々に、忍びくくの初紅葉
 誰に着よとか錦織らん。折々に、花鳥風月の戯れも、共に散行花の山。鐘こうくと仄
 聞へ、御心細き時しもあれ、己が夕べの床急ぐ、妻こひ鳥二つ三つ。供人なふ四ツ五ツ五文
 字は、歌の中山清閑寺、彼の神垣の年古し、天の帝の御廟野よ。左手の山の岡の邊」と、
 御手を取て教ゆれば、宮は左右の言もなく、「世々の日繼の天津君、民を恵みの言の葉
 の、露の流れを汲乍ら、成行果の淺ましや」と、御涙せきあへさせ給はねば、清貫希世心
 なき、牛も尾を伏せ角を伏せ、涙を流す有様に、草木も哀催せり。秋の田の、刈穂
 の葉屋風落て、賤が手枕寢亂れし、紙干す布干す又稻も刈干す。我は袂の乾く間も、な
 いそなないそ澤邊の蛙、斯る思ひはよも知じ。紫竹交りの藪の下、春の縁の東風菜。小
 笹姫笹行く袖に、唄着て通へ。笠着て又通へ。涙の雫雨勝り、雨にはあらで、や是の、
 木々の、木々の木の葉が、はらりほろり、はらくくと風^{かぜ}に諸葉の宮所^{みやどころ}、今日^{けふ}を限り

諸華一宮の名、
脆きにかく
とけしなき一匙
鈍
たばつけん一東
ねつけん
五味子一草、
名にしおはす逢
坂山の五味子の
歌による

雨による一雨に
よる田蓑の島を
けみ行けばなに
は隠れぬものに
ぞありける（古
今集）
みさむらひ一み
さむらひ一笠と
申せ宮城野の木
の下露に雨は増
れり（同上）
突からに千軒
換神のきりけん
つくからに千軒
の坂も越えぬべ
らなり（同上）

と伏拜み、登り下りの旅人も、心々に今宵しも、誰が誰と、伏見の山見へて、彼の黄昏の私言、今日に浮ぶ種ぞかし。急ぐとすれどとけしなき、牛の玉鐙遅く共、心の駒は日に千度、戀しき方に走井の、水櫛の齒もよしやよし、何時を頼みにたばつけん、我黒髪さねがらの五味子、逢坂山にぞ着給ふ。清貫希世兩卿は、宮を木蔭におろし参らせ、「宣旨黙止難く、是迄供奉せしめ候へ共、何處に捨置申すべき。去るにても我君は、堯舜やうしん以來の賢王とは申せ共、現在御子を捨給ふ、教慮如何成事やらん」と、涙にくれて申しけり。蟬丸せみまる聞召「あら愚や人々よ。前世の戒行拙なくて盲目と成し故、去れば父帝の御情なきには似たれ共、此世にて因果を果し、後世を助けん御計策。是こそは親の慈悲、捨置歸れ」と宣へば、二人は彌涙を流し、「此御有様にては盗人の恐れあり。御衣を給はつて箆を参らせ候はん」蟬丸、是は雨による、田蓑の島と詠せし箆か「二人さん候雨露の爲なれば、同じく笠をも参らす」蟬丸、是は御侍三笠と詠し物よなふ「三人又此杖は御道案内」蟬丸、實にくも突からに、千歳の坂も越えんと、彼の遍昭が詠し杖か。夫は千歳の榮ゆく杖。爰は所も逢坂山、關の藁屋の竹柱。斯る浮世にあふ坂の、知るも知らぬも是見よや。延喜の王子の成行果て、こは抑も如何成る例ぞ」と、聲を上て泣き給ふ。宣旨なれば人々も、名残の袂振

唯一月の桂、十五夜に光のますをみるると云へる也

三瀬川一死して三途川にて宮に逢はんと也

切て、涙乍らに歸らるよ。王子は跡に只獨り、琵琶を抱きて竹の杖、伏轉びく、「去らばくく」の聲計り、梢の木魂山彦を、せめて夫かと力草、分て山路に三重入給ふ。桂はみゆる三五の暮、名高き月に逢坂の、關の清水と聞へしは、江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も、是を佛の關伽桶や。柄杓の露の玉襪、月を汲んと秋に澄む、清水が元に出らるよ。時に柳の木隠より、若き女の走出、石を袂に拾ひ入、「南無阿彌陀佛」と云ひ捨、既に清水に飛入る所を、稚兒達引留め、「放生第一の靈水にて、捨身思ひもよらず」と有ば、女「いや迎も存命果ぬ身ぞ。御慈悲に見逃して死なせて給」と振放す。是々、左程思ひ詰しには仔細こそあらめ。品に依て兎も角も、先鎮靜て語られよ。平にくくと巾さるよ。彼の女顔打ぬめ、「恥し乍ら自らは、此山に捨られ在します、蟬丸様の思ひ者、直嫌と申す者成るが、御行方の懐しく、是迄彷徨候へ共、御在所も定かならず。人に尋て候へば、御身の不具を羞合て、人に面を合せじと山深く入給ひ、今は生死も知らざると、聞くより浮世の頼みも切れ、此清水をば三瀬川、逢瀬を急ぎ候ぞ。早々死せ給かし」と、又潸然とぞ泣居たる。稚兒達聞き給ひ、「扱痛はしや我々は、清閑寺の稚兒成が、山踏の行法に、御在所は存じたり。餘所乍ら見せ申さん。去乍ら、人音すれば逃隠れ給ふ間、必

案々―消え盡き
ん貌

疎韻落―物殺し
き響を發す、此
句和漢朗詠集に
あり第三第四句
を宮の上に轉じ
たり
四の折柄―四つ
の緒、琵琶にか
て、所にあひて
哀を催す意

正木の寫―眞折
と尊く、常盤な
る葛草、此句平
家物語にあり

盤渉平調―調子
の名

ず聲ばし立給ふな。只御姿を見る迄ならば、いで／＼案内巾さん」と、夕の雨にさす笠
や、空も涙も定めなき山路成らん。三番第一第二の絃は索々として秋の風、松を拂つて
疎韻落つ。第三第四の宮は、我蟬丸が調べも、四の折柄なりける村雨かな、流るよ水の
哀世の、其理も目に見ぬ、月の入さも知ざれば、夜晝わかん方もなく、谷の梟閑子
鳥、梢を渡る颯や。何を恨みて猿鳴く。落葉衣に露重く、月を擔に肩瘦たり。移れば
變る哀さよ。去ればにや、夕日の巡る方をこそ、都の友と招く手に、其方の嵐懐しく、
又森々たる、野分に琵琶を弾じては、過し寢覺の忘れず。鹿の妻こふ聲迄も、御身の
上と無情なし。正木の蔓青葛藟、來人有共知り給はず、横や柏を押分けて、杖が枝折の
岨傳ひ、躑ひ辿らせ給ひける。姫は彼れよと見るからに、「契りし人が淺ましや」と、縋り
寄らんとせし所を、稚兒達押へて、「ア、音高し。人音すれば逃隠れ給ふ故、物言事は叶は
ずと社、最前より申つれ。只音せで」と有ければ、姫は詮方涙に曇る、鏡の影か我戀は、
逢とはすれど物云はぬ、我山梔の色香をも、見すや知らずや淺ましやと、聲をも立す忍
び音に、噎返りてぞ泣給ふ。宮は斯共白糸の琵琶取出し、盤渉を平調に調べ換へ、「やよ
や待て天津雁金言傳ん。古郷の秋は如何ならん。我は深山に住佗て、琵琶より外は友な

一夜泊り云々
一 謡曲關寺小町に
ある句かけ戸
にかけをかく

是や此一此歌の
意は會者定難な
れどつまり一つ
に歸すとたり

し」と、撥をあけ給ひし時、風が持て來る村雨の、紅葉遅しと夕時雨、一むら颯と降來れ
ば、蟬丸琵琶を濡さじと、此所の木の下彼所の木蔭、濡ても寢んと詠ぜしは、花に戯れ
し歌のさま。我は又賤の夫がく、擔く袖笠笠の、雨に木の葉も亂るよ初時雨、彼方
へ走り、此方へ走り、さらりくさらく颯と、駈り彷徨ひ身は濡衣。木蔭なければ雨
も溜らず。人々見る目も痛しく、少小高き岨蔭より、笠を密と招懸れば、宮御耳を敬て
て、「不思議や雨は降乍ら、身に掛らぬは木蔭よな。口惜や古へは、一夜泊りし宿迄も、
錦の座褥綾の床。垣に金花をかけ、戸には水晶を列ねつよ、變輿屬車の玉衣の、隙間の
風も厭ひしに、斯淺ましき苦席、敷とも敷じ世の中よ。思ふ人とし片敷ば、玉の臺も愚
しき。斯とは知らで直姫が、哀何とか暮すらん。戀の昔や。忍ばしの直姫や、と、盲目
の悲しさは、傍に有共知り給はず、獨言たき聲を上、歎き慕はせ給ふにぞ、今は堪兼心
消へ、直姫爰にと云はんとすれど、稚兒達暫し」と留むれば、絶入り消入り伏轉び、身を
悶へてぞ憧るよ、神ならぬ身は是非もなし。良有て蟬丸琵琶も撥もからりと捨、「南無三
寶叶はぬ事に迷ふたり。逢は別れの始、獨止まる道ならず。色も匂ひも一盛り。ア、思
ふまじ歎かじ」と、一首の歌に斯計「是や此行も歸るも別れては、知も知ぬも逢坂の關」

雨降らば云々
有漏路より舞
風吹かばふけ
二休

たをやぎて一和
きて

汝月明一月は眞
如の月

「明日に別れ夕暮に、逢坂山の旅人の、往來も夢のすさみぞや。雨降れば降れ風吹ば吹け。山の奥こそ住能れ。エ、浮世の無常今ぞ悟の花開けし」と、走り出んと仕給へば、人々岸より飛で下り、眞是直姫よ」と縋り付。宮も「是は」と計にて、互に手を採袖を取懸し床しもの物語、盡せぬ物は涙なり。心ぞ思ひ遣れたる。時に兩人の稚兒達、詞を揃へ「如何に蟬丸の御身色を重んじ、思ひに絆され情に沈み、餘多の女を迷せし、因果の霞、心を暗まし、盲目と成給へ共、今の悟の詠歌面白しく」。三十一文字の面に旅の姿を列ね、内には則會者定離、哀別離苦の理り。逢は別れの始と示し、一首に三世を顯せり。神も心をたをやぎて、佛の教に逢坂の、あの關寺の鐘の聲、煩惱の夢を覺すや。法の聲も靜に、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり。晨鐘の響きは生滅々已、薄暮は寂滅爲樂と響きて、菩提の道も暗からず。悟の夜半も明渡る。兩眼は暗く共、汝月明かなり。和歌の妙を授けん爲、我は人丸我は赤人、二人の魂魄顯れ出、共に成佛得脱の、都率に生れん嬉しき」と、言ふ聲計は逢坂山。言ふかと思へば逢坂山の杉の嵐に、立紛れてぞ失にける。蟬丸「あつ」と感歎あり、「夫れ日の本は神國の、和歌を以て道とせり。歌仙の靈魂顯れ出、詞を交す其奇特、未天道捨給はず」と、感

涙袖を潤ほして、「扱直姉に逢事も、神の授くる縁ぞ」と、おのくゆめ 各々夢かと辿られて、たす 狎信心の和歌の道、あはれ 古き例に踏分て、あはれ 打連山路に歸らるよ。夫婦不思議の契とて、あはれ 二度巡り逢坂山の、あはれ 名歌は今に残りける。

第四

右大辨早廣は、うだいぶんはやひろ 千手入道を打滅し、せんじゆ 都の住居も成難く、みやこ 遠國に彷徨しが、「兎角我身上の敵は蟬丸なり。是非に恨を晴さん」と、せみまる 下人等一兩輩召連、げにんらう 逢坂山の谷峯を、あふさかやま 草を分て尋れ共、とも 宮の行衛は無りけり。後は小關藤の尾や、みや 斯る山家も住めば住む、かき 奥の柴人友呼替し、「是々逢坂山にて不思議の物を拾ふたり。抑何と云物ぞ。さあ推當に言て見よ」と、これこれ 琵琶の撥をぞ出しける。樵夫共集りて、あまがつぎともあつて 甲姿は銀杏の葉の形にて、すがた 偕も合點ゆかぬ物。是はこれ 猿の末廣か」乙否々天狗の筭ならめ」と、いやくてんぐ 様々見立笑ひける。時に向ふの岡邊より若き樵夫の是を見て、「やれ各々、夫れは此山に捨られ坐せし、このやま 蟬丸様の琵琶の撥と云物ぞ。賤いやし き者の用には立す。我に吳よ」と云ければ、「ム、して又汝は何にか爲る。様子に由て遣ん」と云ふ。彼男聞きも敢ず、「ヲ、某は彼の志賀の里に世を免れ住給ふ、あへ 博雅の三位と申

かきをかけ一威勢に任せて
顔色一鈍めしき

す人の一僕喜藤太と云柴刈成が、主君博雅の三位殿は、蟬丸様の琵琶の弟子。其由緒にて此間、蟬丸様御夫婦共に、旦那が庵に入給へば、捧申すに是非々々所望」と云ひければ、進扱はそうか。持ても用なし勿體なし」と、與へて皆々通りけり。早廣篤くと聞濟し、郎等に目配せ、喜藤太を四方よりばらくと取圍み、早「是々汝が主人、三位の庵に蟬丸の坐るとや。さあ案内して連て行け。否と云ば踏殺さん」と、かさを掛けてぞ申ける。喜藤太ぎよとせしが打領づき、「ム、聞た、己奴等は強盜よな。ヤイサ己等氣色すればとて、主の家へ盗人の引入が成物か。下郎と思ひ侮るな。四も五も食男でなし。足息災な内、早々歸れ」と怒ける。早廣怒つて、「夫引立て案内爲せよ」「承はる」と下人共、飛懸れば取て投げ、取付ば踏倒し、拐取仲打て懸る。早廣も抜合せ、二打三打働きしが、山路に馴たる荒男、岩共谷共言せばこそ、猿より軽く蹴廻れば、さしもの早廣詮方なく、轉び轉んで逃落ける。喜藤太も是迄と、元の所に立返り、「エ、何でも無い奴等に逢ひ、あつたら汗を流せし」と、柴に棒さしかき荷ひ、鼻歌詠ひ悠々と、志賀の里へと歸ける。左衛門督清貫は、宣旨とは云乍ら、御幼少より仕にし、宮を山野に捨參らせ、無情世に墨染の袂に扮し、國々を、修行念佛他事もなし。去れば古郷忘じ嫌し。宮の御上如何ぞと、都に歸る。漣

持經云々―常に用ふる御經和讃など其儘にて本尊佛も背床しく思はる

化生―化物

ござめり―柳座るめり

や、志賀の浦にぞ着給ふ。古き都の所から、花散里の藁園ひ、檜垣透垣小やかに、最ゆるづける庵有。立入見れ共主人はなし。持佛の香華細かに、持經禮讚繕はず、本尊も昔し覺へたり。如何成遁世者の住家ぞや。世を厭ふ身は誰ととも、斯こそあらま欲しけれ。住持の歸さを待請け、一夜語りて通らばやと思ひ、縁に腰掛待居たり。時に佛壇の下より、女の聲にて「申々」と呼かくる。謂「はつ」と驚き見てあれば、忍やかに戸を開て、雪の様なる手を出し、女「やよ是水一つ給べ」と云ふ。大道心の清貫も「是ぞ化生の業ならめ」と、膝橋慄と震ひしが、「エ、不便や餓鬼道に迷ひし幽靈ござめり。是ぞ出家の役」と觀じ、器物に水を入れ、「求給三途飢渴飽満、南無阿彌陀佛」と差出し、ちやくと手を引退りしが、又恐々立寄て密と覗ば、弓矢八幡髷か成女房なり。「ム、扱は御坊の梵妻よな。いやはや浮世に抜目はなし。誰かは知ねど此庵の濡坊主。所こそ有れ佛壇に、女寢させて私事」思ひ回せば可笑て、獨笑ふて居たりしが、又聲立て、女「あら心能や。今一ツ」と差出す。清貫も滑稽者。「綿持の梵妻殿、些拜み奉らん」と、其手を取て引出し、能々見れば直姫なり。女「扱は御身は清貫か」謂「なふ姫君か」と手を打て、互に呆れ在ます。去共清貫不審晴す「何とて爰には御入」と、問ば直姫聞給ひ、「去ばとよ此所は、博雅の三位とて宮御琵琶の弟子成

坂本一叡山の
鷹、山王は日吉
権現

仕合一所寫

鳩の海一琵琶湖

付出一尋ね出す

用強一丁度適當

る故、扱妾諸共、是に忍び坐ます」と語り給へば、清貫悦び、「宮は何所に渡らせ給ふ。御目
見得致たし」真「チ、宮は御出世の御祈誓に、坂本の山王へ日参遊ばし、今日も三位を御供
にて、御参詣候が、追付歸らせ給ふべし」と、宣ふ所へ喜藤太立歸り、清貫を急度見て、
「彼奴も盗人の同類か。油断は爲ぬ」と鎌取直すを、姫君御覽じ、「やれ喜藤太、彼れは宮の
御乳人清貫と云ふ人なり。汝は氣ばし違たるか」と宣へば、ム、扱はそうか御免々々。拙
者は山にて強盜に逢し故、扱只今の仕合」と、有し次第を語りける。清貫情々聞給ひ、「否々
是は盗人ならじ。早廣に疑ひ無。大勢催し此處へ押掛んは必定。垣一重の庵室に、長袖
足弱過ち有ば後悔せん。いで山王迄姫君をも御供し、宮をも誘なひ奉り、一先都へ登
べし。それ喜藤太御手を引け。暮ぬ先にと夕浪の、鳩の海邊を濱傳に、坂本差てぞ 三三
急ぎける。爰に又千手太郎忠光は、父入道を早廣に討せ、其無念晴やらす。老たる母を
肩に掛け、親の敵早廣を、是非一太刀と心懸け、野山に起臥し付狙ふ、所存の程こそ理
りなれ。時しもあれ志賀の里にて早廣を付出し、忠「さあ今ぞ日比の運試し。天の與へあ
ら嬉しや」と逸れ共、見れば敵は大勢にて群り来る。「老母を何處に置べきぞ。エ、屈強の
庵室、御免」と言ひ捨つつと入、持佛の下段の戸を押開、母を忍ばせ奉り、「あら心安や。

はつこむ一踏込

みつわぐむ一
たく老いたる
鏡、年ふれば我
黒髪も白河のみ
づはぐむ迄老に
けるかな(後撰
集)

知ぬ迄一迄は助
辭

此上は腕限り太刀限り」と、身繕ひする所へ早廣主從七人にて、「博雅の三位が庵とは是な
 らめ。ほつこんで討取れ」と云ふ程こそあれ、我先にと亂れ入る。忠光戸口に立塞がり、
 「千手太郎見忘れたか。己れをこそ尋しに、神佛の宛がひ能も爰へ來りしな。親の敵覺へ
 たか」と、無二無三に切て懸れば、先を取れて動顛し、おびへて颯と退きしが、踏止れば
 打かけ、取て返せば切りかけ、打かけく息をも續ず、遁る敵に追縋ひ、粟津が原へぞ追
 駈ける。斯とは知で、博雅の三位蟬丸の御供して、清貫とは道違ひ、籠の田面下向道
 己が庵に歸りける。蟬丸仰せけるは、「誠に師弟の縁とて、此度の忠節淺からず」と宣ふに
 ぞ、博「斯る御用に立事生前の本望。先は姫君嚙ぞ御淋しく、御心も盡ぬべし」と、佛壇の戸
 を開、御手を探引出せば、「ヤア是何じや」七十有餘の老女、頭の雪もみつわぐむ、老髯
 ひて出でける。三位「はつ」と飛退けば、宮も驚き、「やれ何事ぞ氣遣し」博「さん候姫君、俄
 れば骨荒て、老の波立身の皺に、瘦て色香も無りけり。宮も呆れて坐ませば、三位彌當
 惑し、「今朝程宿を出さまに、確姫君を入置いたりと存するが、取違へたか知ぬ迄」と、眉
 を擧めて居たりける。痛はしや蟬丸は、御涙をはらくと流し、「我此姿と成事も、彼の

百歳に云々一
歳に一歳足らぬ
つくも我々
ふらし仰に見ゆ
(伊勢)持
持扱一持餘す

さん候一然に候

姫故と樂しみに、情も戀も覺果し。天麿の所爲か冥罰か」と、御愁歎こそ道理なれ。老母は聲を聞覺へ、御顔面をも思ひ付、老「なふ宮様か。お懐かしや床しや」と、縋り付ば、蟬「ア煩さ。免せく」と彼方へ遁、此方へ隠れ百歳に、一歳足らぬ九十髪、持扱かはせ給ひけり。老「ヲ、御尤く。名を申さずば御見忘れ候べし。妾こそ君が爲め早廣に討れし、千手入道が後家忠光が母にて候」と、件の有増語らるれば、蟬「實にく夫れよ珍らしや。是は是は」と手を打て、一先不審は晴しかど、直姫の行方なし。最前の騷動に、敵や奪ひ取つると、未だ氣遣堪へぬ所に、清貫喜藤太姫君を誘引し、「宮に出逢ひ奉つらぬは、道こそ違つらめ」とて、舊の庵へ歸らるれば、蟬「こは清貫か我君か」「夫よ」「彼よ」と寄集り、泣つ笑ふつ取りぐくに、語らひ哄み給ひけり。然りし所へ千手太郎、薄手少々受乍ら、大汗に成て馳歸り、人々を見るよりも、「はつ」と驚き嬉しさに、左右の言句も出ばこそ。夢かと思ふ氣色也。各々一度に「やれく千手か忠光か。事の首尾は御老母の物語にて承る。して先敵は討止めしか」「忠さん候敵は大勢と申し、長追に力盡き候を、火水の底もと存せしかど、母が有様氣遣しく、無念乍らも打漏し、とつて返し候。幸哉此上は、恐れ乍ら母を君に預け參らせ、心身輕くし罷り出、敵を討て歸るべし。はやお暇」とぞ申しける。清

辻談一干手太
郎辻にて説法す
一生増悪一一生
絶えず罪を流る
妻子珍寶云々
妻子より王位に
至らば死ぬる時
は伴はず(大集
一息云々一息が
さる)

焦熱一焦熱地獄
の薪
化城論品一焦熱
經卷三にあり

己身一自己の心
唯心一唯一の心

そ殊勝なれ。專誠に淺ましいかな歎かしいかな。今日の衆生一生増悪不斷煩惱の塵に交はり、朝に怒り夕に悦び、貪嗔痴慢の色香に迷ひ、假にも佛法と云ふ事を知ぬ。愚成かな妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と申して、現世にて寶の山を築せ、子孫奴に侍かれ、花に詠じ月に嘯ぶき、無上の榮花を究むるといへ共、一息切斷臨終の嵐に、貪欲私欲の火の車、業障の雲に轟ろき誘ひ行とくんば、日比の下人も従がはず、金銀衣服も身につかず、無間奈落に眞倒顛に墮落事、三つ羽の征矢より最早し。財寶は地獄の家産、名聞は焦熱の爪木共譬へたり。扱如何がして各我等佛には成ぞと申せば、有難い事の、化城喻品に曰く、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。此文の心は一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。去れば愚痴無智の凡夫、心の外に佛を求め、穢土の外に淨土を求め、却つて迷ひの種と爲す。是を和らげ傳教大師の御歌に、悟とて外に求むる心こそ、迷ひ初ける始成らん。又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名逆、釋迦と阿彌陀は譬へば目と云ひ眼と云が如くにて、一佛異名同一體、心の外に來迎なし。坐から爰も蓮華道場、寢ても佛覺ても佛、立ても佛居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば、己身の彌陀唯心の淨土なれば、心外無別法、即心成佛。取も直さず居も直らず、

不退快樂一常住
の檢變

四頓八辯一辯舌
上く

消し飛ぶ一佛言
集賢

願人奴一願人坊
といふ一種の乞
巧

下り松一名木の
名

枕付一四子の類

十方偏照の光明を放ち、金色の蓮臺に駕せられ、一瞬刹那が其間に、忽ち安養無垢世
 界、不退快樂の都に至らん。何疑ひの有べき」と、四頓八辯流ると如く、語り給へば往來
 は、皆々禮して通けり。右大辨早廣は、丹波の方へ落行んと、編笠引こみ驛馬に乗り、
 白川越に來りしが、傘にや恐れけん。早廣が乘たる馬俄にけしとみ跳上り、鞍を放れて
 どうど落る。早廣怒つて、「是願人奴、馬上にも用捨せず傘をひらめかし、落馬させつる奇
 怪」と、傘取たるを吃度見て、忠「餘さじ」と飛掛れば、「南無三寶」と馬引寄せ打乗、鞭を當て歩
 ば、長柄に槍を仕込だり。忠「返せ」と聲を掛け、息をも續ず追駈しは、只韋駄天の如く
 まする。忠「卑怯者臆病者、返せ」と聲を掛け、息をも續ず追駈しは、只韋駄天の如く
 也。半道計追かけしが、馬の足並早廣に、十四五丁下り松の木蔭につつ立、又駈出んとしけ
 れ共、こは如何に足立す、野山に伏したる千手太郎、二三日五穀を食せず。咽渴して躑
 躑と、一足も引ればこそ。「エ、冥加に盡きたり。口惜し」と、齒咬を爲して立たる所に、
 誠に天の與かや。死人に供し枕付の供物、松の下に棄て有。「有難し幸」と、一口にぐつ
 と喰、一ゆり捨て力足を踏だれば、金剛力士の如く也。「さあ千里萬里も一飛」と、又駈
 出し 三重行水の、神屋川にて程なく追付き聲を掛け、馬の鞞鞞壺掛て突ければ、馬は

堪へず岸破と伏す。早廣下り立「心得たり」と、太刀を合せて防ぎしが、一念の鋒先岩を劈く勢ひ、左の肋を貫かれ、仰氣に返せばつつと入り、取つて引伏馬乘にどうと乗り、「親の敵諸人の仇、年來の恨み思ひ知れ」と、三刀四刀差通し、「エ、嬉しよ心地よし」と、嬉し泣に泣居たり。「先母上に悦ばせ奉らん」と、首搔落し槍に貫ぬき振傾け、蟬丸の在ます一條大宮逆髪さかみの館へ、飛が如くに急ぎける、心の中こそ三重嬉しけれ。案内にも及ばず、「千手太郎忠光、敵早廣が首取て参りし」と、大音揚て呼はれば、希世清貫宮御夫婦、「是は是は」と走出、「扱もお手柄く」と、勇み悦び給ひける。此年月の難行、又下り松にて餓に及びし時、亡者に供へし供物にて、餓を凌ぎし有様具に語り、「母に申して悦ばせん。早逢せて給べ」と申せば、人々は涙ぐみ、兎角の事も宣はず。思「こは心得ず如何成仔細ぞ、聞させ給へ」希世涙を止め、「今更語るも便なき乍ら、御老母の御事は、廿日程以前より、風の心地と候ひしを、醫療手を盡せし甲斐もなく、一昨日の暮方に、終に果敢なく成給ふ。只今の物語り、亡者の供物を食せしとは、それこそ御老母の供物よ」と、語も敢ぬに忠光は、「はつ」と計りに伏轉び、聲も惜まず泣居たり。心の中こそ無慙なれ。最ど涙に呉乍ら、「偲は亡母の供物にて、我渴命を繋ぎ本望を達せしかや。草の蔭迄子を思ふ、母の

懐胎十月の由來

日を覆ね、米魚にかく、壇場を綱代木と見立てたり

胎金兩部一胎藏界理世(兩部界)智理の兩部七寶云々清淨なる山伏の上衣知行一知體と行

無漏一悟りを閃きたる事

水溜らねば一足利尊氏の異母千代野の歌に、桶の底抜けて水溜らねば月も宿ら(國花菫葉記)阿字本不生一眞實宗にて阿は眞本の意之を一切の不生を悟る

宇治の綱代木をかさね、今日満願の大法事。宮御夫婦は願主にて、壇の左右に着座あり。大君御幸なりければ、洛中近國かくれなく、信心の參詣は、老若男女貴賤都鄙、袖を列ねておびたどし。斯くて安居院の小聖は、役の行者の跡をつぎ、胎金兩部の峰をわけ、七寶の露を祓ひし篠掛に、不淨をへだつる忍辱の袈裟。知行おとらぬ御弟子達、左手右手に相具し、壇上に差かより、先づ加持の讚をぞ誦せられける。少謹上再拜々々敬つて申す魂しづめ。それ無漏無上の法界には、自他の念更になし。悟るときんば十方空、迷ふがゆゑに三界城、喜怒みだりに起つて、哀樂是が爲に止む事なし。花と見よ雪と見よ、龍田の錦吉野の雲。うつよなければ夢も結ばず、水たまらねば月もやどらず。今ひるがへす幣帛に、阿字本不生の風を招きて、冥朦の闇を晴さん。そもく行者が修法と云つば、初七日は曼陀羅供、二七日は放生供、三七日には龍女成佛水施餓鬼、四七日は光明供、五七日には妙なれや法華識法、六七日は法よしのしゆり三昧、今月今日七々日の、大結願と申すには、妊婦安平子安の法。今の御法に怨を忘れて、擁護の毗をめぐ

十月の十相―十月の變化のさまあたか―恰も也

獨鈷―佛法にて疑を絶つ行道具、之に三鈷五鈷の別あり

地水火風―空を略せり

らし給へ」と、懐胎十月の十相を、語り 三重給ふぞ殊勝なる。「先づ初月は一氣體中に孕まれ、其形あたかも鶏卵の如し。これ本來一とくの精水。かたちに取ては混沌未分、名にとつては大元大素、神道にては國常立の尊と申し奉り、漢儒は天の生民を降すと云ふ。佛法にては本有の毘盧遮那、不動明王の請取たまひて、本來の空の一物とはかや。二月めには陰陽の二氣相和して一氣と成り、獨鈷の形とあらはるゝ。是を胎子と名付けて、形のはじめ、りのつぎにて、藥師如來の受取なり。三月めに至つて、人倫の本心わたくしなく、始めて一念きざす。天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ、唐土の聖人は明德と名付、我朝にては神慮と仰ぐ。名づくる所はへだたれど、三教一致は、やこのくハツア〜このく、三鈷の形文殊菩薩の受取なり。はや四月めは地水火風の五輪悉く連なりて、仁義五常の五鈷の形、普賢菩薩の守護なり。扱五月に及んで、六根手足をさいしき、五體残らず連續す。此時よりその體に、守護本尊定まりて、付添ひめぐる腹帶や、地藏菩薩の受取なり。六月になれば好む所欲する所自然に生じ、母の乳房にくひつきて、親の乳を吸取る事、およそ三石六斗なり。則大悲觀世音是をまもらせ給ふとぞ。扱七月に至つては、忝なくも御佛は、三世の因縁壽命をかながみ、扱こそ人間一生にめぐる因果の

輪寶—輪轉王の
寶器

胞衣—胎兒を包
む膜

廿五有—三界總
攝則六道分乃二
十五有（觀經名
義集）

修多羅の聲—讀
經の聲

小車の輪の、輪寶に刻み付、かうべにかづけ給ふとかや。彌勒菩薩の受取なり。八月めに及んでは、阿閼菩薩の守護にて、輪寶變じて胞衣と成。九月には成長し、意念ある故、法界の惡魔惡靈、毒氣を吹き入れ吹きかけ吹きこみ、此界に出生せば、己が魔道へ引入れんと、隙間を狙ひ窺ふなり。父母の所行所念に引れ、善をなせば善人、惡をなせば惡人と成り、極樂地獄の堺ぞとて、産神を定めおき、勢至菩薩の守護なり。當る十月は愛染明王。されば六道四生、二十五有の其中に、人よりも尊きなく、皆佛性を備へたり。彼も此も一佛一體、汝が怨念消除みぢん、もとの佛果に至りたまへ。おんあびらうんげんたら、たかんまん急く、如律令」と誠精をぬきんでし、修多羅の聲も川風も、天にひびきて有がたし。時に不思議や、神木の松の木の間、北の方の幽靈影の如くに現はれ、北「此御經にひかれて、五逆の達多八歳の龍女、共に佛果を受けしぞや。恨を晴れて今よりは、護持の佛と成るべし」と、の給ふ聲も芳しく、如意觀音と現れ、光りをはなつて失せ給ふ。此光明に照されて、蟬丸の御兩眼、くわつと開けて、「是はく」との給へば、君臣上下をしなべて、悦びさどめき給ひけり。扱小聖に御禮あつく、御夫婦うちつれ還御ある。御子孫繁昌國繁昌、千秋萬歲萬々歲、つきせぬやどこそ久しけれ。

